

心理学科

こころについてのエッセイ<8>

チャムシップとピアシップ

前回のこころのエッセイ<7>では人と上手に関わるための力として“ソーシャルスキル”が紹介されていましたが、同級生や友人との人間関係に悩んだことのある方も多いのではないかと思います。この同級生や友人との人間関係というものは、発達段階によって変化するとされています。

小学校高学年～中学生頃からはじまる思春期の子どもたちの同年代の関わりを、アメリカのサリヴァンという精神科医は「チャムシップ」と呼びました。これは簡単に言うと仲間グループを作って“同じであること”を大切にする関係性で、秘密を共有するなどして、互いの共通点を確認し合うという特徴があります。思春期の女子は仲間グループを作りやすいとよく言われますが、これがまさに「チャムシップ」で、こういった仲間グループは親から自立していくときに生じる不安を支えてくれるものでもあります。



しかし、高校生以降になると、段々と“みんな同じ”だった仲間グループの中にも、個性の違いや能力の違いが生じてきます。そうなるとう度はそれぞれの趣味や将来のこと、価値観などを話し合い、“同じであること”よりもむしろ他の仲間と“異なるところ”に気づいていくようになります。このような“異なるところ”を認め合い、それでもその仲間集団が居場所であることを感じられるような関係性を「ピアシップ」と言います。このように互いに

異なる部分を持ち合わせていても、自他の違いを認め合いながら友人関係を育むことができるようになってくると、少し同級生や友人との人間関係の悩みも減ってくるのではないのでしょうか。

